慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Arthur J. Penty: Post-industrialism.
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.305(147)- 307(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「論集」第四卷所收の土地問題に關する論文、及び土地改良に關する論文の說明する所は、Mill が、其執筆當時に於ける各政黨所屬の多數人士と同樣に、現在の土地制度の側に於ける勢力の强さを輕視したと云ふことである。而して同樣の言は、移して以て Sir Henry Maine の「村落共同團體」(The Village Communities) の批評に於ける或語句にも適用することが出來る。Maine の著書は、非常な興味と歎賞とのために特殊の注意を受けるに足るものであつて、夫れは、Mill 自身よりも遙かに保守的傾向と深き關係のある場合でさへも、Mill が天才と博學との著書を祕かに求めて居たと云ふことが說明する所の興味であり、又歎賞である。

Bishop George Berkeley の著書に關する論文は、心理學的批判の斷片として、頗る眞正價値ある以外に、又 Mill の見解に大いに反對せる宗敎的見解と深き關係のある天才に示した同情を以て目立つて居る。

「論集」第四卷は、其他有益なる論文以外に、George Grote の「アリストートル論」の批評を載せて居るが、評者 Mill に對しては多數の人が斯る主題に對する批評として傾聽せらる可き最高の要求あることを否定しないであらうし、又多數の人は、彼のために論理學の創設者の最も著名なる後繼者の間に Sir Francis Bacon と並んで一の地位を指定するであらう。(Essays in Political Economy, 1888, pp. 54-59.)

新刊紹介

Arthur J. Penty;—Post-Industrialism.

pp. 154. Price. 6/— George Allen & Unwin. Ltd.

產業革命以來の社會は機械の社會であり、物質の社會である。すべての社會現象は機械てふ生產力によつて制約せらるゝに至つたのである。營利をその本則とする近世經濟組織中に生存し、一度經濟學祖アダム・スミスによつて分勞の利益を敎へられた經濟學者は、機械と分勞との世界を讃美する。そは能率の社會であり、數量の社會である。生產費の低廉と產出財貨の數量的增加、さうしてこれに伴ふ自由競爭とは、過去並びに現在における幾多の經濟學者の黃金世界である。

この自由競爭を基礎とする社會、生產費の低廉と財貨の數量的增加を目的とする、換言すれば貨幣價値增殖を目的とする生產に對して、倫理と藝術の立場から批判、攻擊した人士は少なしとしない。英國のヴクトリア時代は英國の「社會的進步」の最高潮に達した時とせられてゐる。この時代にあつて哲人トマス・カアライルはその倫理的見地からマンチェスタア學派の自由主義とその實際とを攻擊した。カアライルにおいて、その優秀なる師を見出したジョン・ラスキンは倫理と藝術の立場から中世紀的精神の復活を主張した。ジョン・ラスキンが藝術批評家から社會批評家となつたのに對して、身自ら藝術家であつたウヰリアム・モリスは、その藝術の立場から現代の物質文明の野卑を攻擊して、共產主義の陣營に走つた。彼等の立場は、他の社會主義者が社會問題の起因を胃の腑の問題と解するのに對して、そを倫理の問題であり、藝術の關するところであるとした。彼等の主張は共鳴を得ることが比較的少なかつた。藝術的運動である Art and Craftsmovement（モリスはこの運動に參加す）は工藝において中世紀的傳統を復活せしめんとした運動であつた。さうしてこの運動の失敗と共に起つたギルド思想（千九百六年）は正にラスキン、モリスの傳統を受けたものである。

然るにギルド社會主義運動が漸く勞働者階級の間に勢力を得るや、その主要なるナショナル・ギルヅ同盟の一派（コールの一派）は益々ギルド運動本來の中世紀的精神と離れ來つて、集產主義との妥協に生きんとする。この時に當りて、ラスキン、モリスの思想的傳統を最も有力に把握して行かふとする者は、吾人がこゝに紹介せんとするアーサー・ペンティ、その人である。ペンティの新著 Post-Industrialism は、彼がラスキン、モリスの傳統に忠なることを示してゐる有力な證左である。ペンティは先づ現代の社會問題の根底が機械の亂用にあることを指摘し、如何なる所有權形態の變更も、機械の亂用をそのまゝにするときは、社會問題解決の期あらざることを警告する。（第一章）この點に就ては既にラスキン、モリスの有力に主張したところである。然るに多くの經濟學者社會主義者は、生產額の激增なる一事に幻惑して、機械化現象の人生に對して如何に悲慘なるかを悟ることが出來なかつたのである。アーサー・ペンティの議論は、この點を基礎として出發する。今原著よりの僅少なる引用によつて、著者の大體の考察を知るに滿足しなければならない。

「機械は模倣的である。そは如何なる意義においても、創造的ではない。機械は模倣をする、然もそは一定物だけしか模倣し得ない。何時もあるものは省略せられるのである。機械によつて再生產し得ないある品質がある。その品質は氣分である。機械の產物には氣分が出ない。」（四二頁）

「藝術は精神的目的に役立ち、機械と商業主義とは物質的目的に役立つ。……審美的並びに機械的標準は詩と論理のそれの如く異なる。」（四三——四頁）

「勞働の細分とその近時における科學的管理法への進化は產業文明の呪である。何となれば、そは人間を自働機械の水準に下し、人をして單なる人間の斷片ならしめ、さうしてその精神的、道德的、肉體的生活を碍害し、彼等の人格を分離せしめ、さうして、市場における供給過剩は彼等を苦汗制度と經濟的不安とに導くからである。」（五八——五九頁）「文明を保存せしめるならば、ある程度までの專門化（スペシヤリゼーション）を吾々は持たなければならない。然しながら、人間がもし、道德的に、智識的に、また精神的に墮落しないことを欲するならば、ある點において制限を設けなければならない。」（六二頁）何となれば、「すべての創造的の仕事は窮極において個人的であることは眞實だ」からである。（六五頁）

「こゝに困難なことは、現時の普通の人々は、宗教と藝術とから離れてゐるので、たゞ數量上のことのみしか考へられないことである。彼に對して進步の觀念は一の數量的觀念である。故に彼は數量的標準の放棄を意味するすべての思想を排するのである。」（七五頁）

以上引用するところは、本書前半の部分であつて、その後半は如何にこの數量的社會を救ふべきかに關するものである。彼はこの部分においてギルド組織やデモクラシー、中世紀への復歸の意義を述べてある。けれども吾々の興味を感する點は、この後半における建設的部分でなくして、前半の批評的部分である。吾々經濟學徒は既に久しきに涉つて、經濟學內に彌漫する物質主義に禍されて來た。經濟學徒は數量以外に何等かが存在することを知らなければならない。嘗てフリエによつて主張せられた愉快なる勞働の議論は、久しく空想の名の下に棄てられて來た。ラスキン、モリスの勞働論も多くの經濟學者の顧みるところとならなかつた。吾々は現在の經濟學徒が再び勞働の新解釋へ歸るべきときは來たと思ふ。私がペンティの書を紹介する所以はこゝにある。嘗てクロポトキンは社會問題に就いて、青年に訴ふべくその An Appeal to the Young を書いた。私はその意味においてペンティの著書を青年學徒（年齡に就いて云ふのではない）に紹介したいと思ふ。

（加田哲二）